

平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）
相談支援センターの機能の評価と地域における活用に関する研究
（研究代表者 高山 智子）
分担研究報告書

病院患者図書館と地域の公立図書館の連携とがん情報提供支援に関する研究

研究分担者 郡司 篤晃 特定非営利活動法人医療の質に関する研究会 理事長
研究協力者 田村 俊作 慶応大学文学部教授、慶応大学図書館長
小川 俊彦 逗子市立図書館 館長

研究要旨

疾病に罹患し終末を迎える経過の段階ごとに情報ニーズが存在する。NPO 医療の質に関する研究会は 2008 年度から 5 年間で 50 病院に患者図書室を寄贈してきた。その中には 26 のがん拠点病院が含まれる。しかし、病院では死についての情報提供ははばかれる。そこで、公立図書館との連携が模索された。図書館の専門家である研究協力者との検討を重ね、終末における情報支援の在り方、具体的な方法についてまとめ、結論とした。

A. 研究目的

がんは発病から治療、そして終末までの経過のそれぞれ時点で情報ニーズが発生し、支援を必要とする。

NPO「医療の質に関する研究会」は、2007 年度以来、全国の病院を対象に、患者図書室を寄贈してきた。しかし、病院では死を迎えるにあたっての情報提供はしにくい。そこで、病院図書室と地域の公立図書館との連携による問題解決の可能性について検討することを目的とした。

B. 研究方法

本研究は研究協力者らがおおよそ月に一度の討論を重ね、連携の必要性と具体策について検討を重ねてきた。

（倫理面への配慮）

個人を対象としないので必要なし

C. 研究結果

NPO 質研は 2013 年度に、50 の病院に図書室を寄贈した。その中には、26 のがん拠点病院が含まれている。入室者数から見た図書室の利用のされ

方には大きなばらつきが存在し、その差をもたらす要因は医療者の図書室の活用の差にあることがうかがわれた。また、基礎的なリテラシーの向上により、医療者とのコミュニケーションの質と効率が向上することも示唆された。しかし、死についての書籍は希少であった。

近年、図書館は単に静かに本を読む場にとどまらず、各種のイベントを開催するなど、地域の諸活動の拠点となりつつある。

討論の結果から、人々が病を得て終末を迎えるそれぞれの場面で、更に残された家族に大きな情報ニーズが存在するが、特にわが国では、いわば「周死期」に社会資本の減少に伴い大きな混乱がある。

具体的には、多くの取り組みがその可能性として検討された。

- 1) 諸々のシステムの構築：例えば、図書館側の移動図書館、団体貸出しなど、病院図書室の具体的なシステム
- 2) 技術的な開発：例えば、いわば電子図書室で

ある「しらべる君」の共同評価・開発・閲覧、
携帯端末などを活用した種々のコンテンツの
充実・閲覧

- 3) イベントによる啓蒙・普及：関係者や団体等
との共同でシリーズ化したシンポジウムの開
催など

D. 考察

このような連携の重要性は「がん」だけに限
られない。また、関係者の連携が病院と図書館だ
けにとどまらないことは当然である。現在でも多
くのボランティア組織や NPO や宗教団体が存在す
る。その中において NPO 質研が寄贈した患者図書
室や、がん拠点病院の相談支援センターは多くの
関係者間の連携のイニシャティブを担っていく
べきであろう。

E. 結論

公立図書館と患者図書室との連携は、我が国
における「周死期」の文化の醸成に寄与すること
が期待される。

F. 研究発表

1. 論文発表

郡司篤晃「患者の医療情報探索をどう支援する
か」病院 71 (4): 262-266, 2012

2. 学会発表

小村陽子、板垣貴志、郡司篤晃、河原和夫；
「インフォームド・コンセント場面での患者に
おける「納得度」の評価尺度開発に関する研究」、
日本病院・医療管理学会（ポスター）京都、
2013.9.28.